

木造地藏菩薩坐像一軀

像内に宝篋印陀羅尼、仏頂尊勝陀羅尼等及び治承

元年八月、大仏師法橋□慶の銘がある

静岡県 瑞林寺

指定年月日 重要文化財（昭和五十七年六月五日）

修理年度 昭和六十二年度

補助事業者 瑞林寺（富士市松岡）

修理施工者 財団法人美術院

鎌倉彫刻成立史の研究上きわめて重要な作品として注目される等身の地藏菩薩坐像である。いわゆる造像記の形をとる右膝裏の銘文には、治承元年（一一七七）八月彼岸中に造像を始めたとあり、法橋□慶が大仏師として像を制作し、併せて像内に書かれた宝篋印陀羅尼をはじめとする陀羅尼、真言等の費用を負担したことが記されている。この法橋□慶は、建久七年（一一九六）に運慶快慶等を率いて東大寺大仏殿の巨像を制作した康慶の可能性がある。

像は後世の修補によって表現が損われ、朽損や矧目の損傷も著しいため、解体を伴う修理を今回実施することとなった。なお頭部は制作後をはじめでの解体である。

形状

円頂。髮際を一段高く彫出し、白毫（木製後補）を表わす。耳朶環状。三道彫出。衲衣の上に袈裟をかける。両手（各手首より後補）は屈臂して前方に差出し持物を執る形とし、右足先を前に出して安

坐する。

法量 単位 cm

像高	八四・三	膝張	七三・三
頂一顎	二四・〇	膝高（左）	一四・〇
髮際一顎	一八・〇	膝高（右）	一四・五
面幅	一六・九	膝奥	四七・九
耳張	二〇・九	裾張	七五・九
面奥	一九・二	胸奥	二四・二
臂張	五四・一	腹奥	二五・〇

構造

頭体幹部は正中線で左右に矧合わせた二材から彫成し、その左右に体側部の肩先から腕の前膊奥までを含み腰脇に至る各一材を、左体側のみ体幹材との間に厚さ約二センチの薄材（現状、正面の数材のうち胸から臂にかけての内割面の断片二材、背面の一材をのぞいて後補）を足して矧寄せる。両脚部は横一材を体部各材の正面に矧付ける。左右の前膊部は内外側に垂れる袖を含めて各一材とし、各内側の袖下方と左前膊部の後方に薄材を挟んで各体側部材および両脚部材に矧ぐ。

基本材はいずれも檜の一材ないしは同一規格の材から木取りしたようにみえる。頭体幹部の二材は幅が各一五・〇センチ、奥行は二七センチ程で、正面と正中線の矧目がほぼ桁目、他の二面が板目である。両体側部の幅は左側の薄材を含めて各一五・〇センチ。両脚部材は高さ一五・八センチ、奥行二六・四センチである。

頭体幹部材は頭体を首柄で割離すが、矧目が襟の内側に沿う側面から背面にかけては上方から下方へ割り進めるのに対し、矧目が胸上部を首の付根に並行するようにわたる正面部分は、あらかじめ矧目に表面からほぼ直角の刻みを入れておき、ついでこれと交わるように下方の内割面から上方へ割る。幅約六・六センチの広い矧面で体部と接合し、体部の背面から打つ左右各一本の釘で固定する。

頭部の二材は、およそ幅三センチ程の矧面を残して内割を施し、玉眼裏を摺り鉢状に刻る。白毫後方の矧面に断面が長方形の薄い雇柄を入れ、内割面の真言が書かれたあとに、矧面を膠付けし頭頂と後頭部に鋸を打って接合し、その後にあらかじめ額の上から両眉の端、耳前方を通り顎下に至る線で面相部を割離している。その際左側はうまくいかずにやり直したためであろうか、途中から矧目が二筋に分かれている。水晶製の玉眼を嵌めて周囲を木屎漆で塗り固め、裏面に腫を墨で描き、朱、墨で縁取る。当て紙は亡失。厚みのある横一材の押え木の一部が残り、周囲を竹釘でとめ、木屎漆で塗り籠めた痕跡をとどめる。面相部の割矧面は幅が広く、膠のみで接合されていた。

体幹部は、左右とも首柄側面のほぼ中央から腕の付根の背面寄りに至る線で正面と背面とを割矧ぎとする。両体側部、両脚部とともに、材の厚みをおよそ二センチ前後とする内割を施すが、矧目の部分は周辺から厚みをもたせて割り残すことにより、両肩を前後に割矧ぐ矧目、両体側部材との矧目の各上端、両脚部材との矧目は矧面の幅を六・六センチ程、その他の矧目は三センチ前後としている。両体側部材との矧目の各上端、両脚部材との矧目の両端の各矧面には、縦二センチ、横一センチ程の長方形の断面の雇柄をも入れ、正・

背面の正中線の矧目は正面下部と背面上部の矧面に同様の雇柄を入れたうえ内割面の各上下二箇所を鋸（亡失）を打つ。体幹部材の両側下部の矧目に沿って、正背両面が接合する幅の狭い束（現状一部欠失）が割り残されており、正面の下端中央には正中線の矧目を挟み、地付に至る像心束の痕を示すかと推測される突起の切断面がある。両前膊の臂前から手首までの各矧目にも矧面の中心に柄を設ける。両体側部の各前膊下方から内割への貫通孔、両脚部左上面の二箇所にあいた小孔には、これを塞ぐために各一材（左体側は亡失）が内側から矧付けられている。そのうち両脚部の中央寄りの一材が墨書陀羅尼にかかることから、内割側からみた形状が似ている他の二材を含め後補の可能性もある。

頭部から胸の肉身部にかけての表面は、矧目など部分的に木屎漆を一ミリ程盛上げ、全面に布を貼り、錆漆下地黒漆塗りの上に白色下地の彩色を施す。衣部の素地に古色が施された正面と背面上部には、布貼り、錆漆下地、黒漆塗り、白色下地が断片的に残る。

### 損傷状況

#### 後世の修補

右眼周縁に鼠害による欠失部分があり、表面から胡粉を盛り上げて補足されていたが、輪郭の形状や肉付けが平板で、左眼の抑揚のある表現との均衡を欠いていた。右の玉眼は一旦脱落して位置が変わり、裏面の彩色が剝落していた。

後補の矧付材に替っていた両耳後部、左肩、左正面の腋から前膊奥の袖を含む内側部にかけて、右耳下方の襟際、左右の前膊のい

れも外側にかかる袖の一部と右臂前の上面、両手首より先、右足先とこれに続く裳先などは、かたちのくずれた粗放な表現であるうえに当初の彫刻面より高く盛り上がる箇所もあった。体部各矧目表層部の損傷箇所は施されていた木屎、埋木および紙貼り泥地古色も同工の応急修理によるもので、周辺の当初部分にかかり、虫蝕、剝落、変色といった損傷も加わっていた。このような後世の修補部が当初の表現を著しくそこなうとともに、構造をも脆弱なものとしていた。

#### 欠失、材の収縮等による変形

右体側部材と両脚部材の後部の像底に虫蝕朽損と鼠害による欠失があり、これに合わせて体幹部材背面から左体側部材にかけての像底、両体側部材と両脚部材との矧面を削り取り、像の安定を図られていた。材の収縮や歪みによっても拡大した矧目の隙間が部分的に狭まり、右側の柄の部分が欠失した体幹部材正面と両脚部材の矧目にずれが生じていた。それらの結果として、体軀は全体に右に傾くとともに僅かながら後方にも反り、両側面の膝奥と腰脇との間に目違いを生じていた。また、これにより顔がやや上を向いたためか、頭部は首柄の後方に小材を打付け、首柄が収縮した分だけ前に傾けていた。

#### 虫蝕朽損、鼠害

虫蝕をともなう朽損は、体部正面の首柄との矧目、両脚部上面、像底が甚しかった。特に両脚部は、右ふくらはぎ後方に大きな欠失孔があり、周辺が表面内剝面ともに広く朽損していた。

鼠害により両耳朶の表層部が損傷し、鼠害孔が左前膊の下方奥、像底の右の膝奥と腰脇にあった。玉眼の押え木が左眼の上端にあたる部分を残して欠失し、玉眼の当て紙を失ったため、両眼が黒ず

み、これが観照のさまたげとなっていた。

#### 割損

左眼の縁が瞳下方で僅かに割損していた。腹部の衣の縁が数箇所割れて欠失し、背中および両膝にかかる褶襞のみねの表層部が一部木目に沿って割損していた。干割れが背面の左中央と右肩後方、右膝側面にあり、背面左中央のそれには制作時のものと思われる埋木による補修が施されていた。

#### 剝落

頭部から胸にかけての肉身部に残る当初の下地彩色は、頭頂、胸部の首柄の矧目に沿う部分が剝落し、額と頬の一部、左眼下方の目頭寄り、鼻先にも僅かな剝落があり、頭部の緩んだ矧目と鏝の上に亀裂や浮上がりが生じていた。衣部は、背面の袈裟の部分を中心に後補の彩色が残り、その下層に白色下地、朱の具、白群がみとめられる。その他は大略剝落して素地を露わし、古色が施されていた。

#### 修理の概要

##### 解体、後補部の修正

各矧目を解体し、体部正面の首柄、正中線、右腋、腹部下端および両袖下部の各矧目と各後補部に盛付けられた補修の木屎、体部背面の両側の矧目に施された埋木および紙貼り泥地古色、矧目の隙間に充填された漆ペーストや薄板等は、すべて除去した。各矧目は漆で接着し、欠失部、隙間は、必要に応じ埋木したうえ木屎漆を充填し、表面を周囲の彫刻面に合わせて整形した。腐蝕した鉄釘、鏝は撤去し、銅釘、銅鏝に打ち替えた。なお体部中央の矧目の鏝は当

初の鋸跡に打った。

後補部のうち形状が適合しない両耳後部、体幹部材を前後に割矧ぐ両肩上面の矧目に沿う左肩前半部と右耳下方の襟際、体幹部材正面の右脚付根にかかる右下端部、左体側材の右側に挟む薄材の肩先、同じく胸脇の表面部分および袖を含む臂の内側部、左前膊部左側の袖口、右の臂前上面と前膊部右側の袖下部、両手首より先(左第三・四指、右第二・五指欠失)、両脚部の像底の一部を割取って矧付けられた裳先、右足先は撤去し、当初部にあわせて檜材で新補した。その際、裳先は像底正面の損傷の拡大を防ぐ意味から、修理前の欠失部を補足する形とした。右臂前上面の後補材は修整して用いた。右眼は周囲の補足された部分を除去し、左眼の周囲に倣って檜材で補作した。玉眼の取付け位置を補正し、瞳を左眼に倣って描き起こした。

#### 構成の補正

像底の欠失は、左体側材の前端と両脚部正面の各膝寄りとの三箇所に残された当初の地付を基準とし、併せて各矧目における部材相互の位置関係と間隔を、当初の矧面や柄、褶襞を中心とする彫刻表現のつながりを手掛かりにして補正しつつ、その厚みを決定した。これに従って像底の欠失部分、体幹部材正面と右体側部材との間、体幹部材正面および両体側部材と両脚部材との間に檜の薄材を新補して構成の復原を図った。なお像底は周縁の割損剝落等を抑えるために可能な限り薄板を貼り廻し、木尿漆でこれを補った。頭部の傾きは、首柄後方の釘痕等によって原状に復し、首柄周囲の隙間には檜の薄材を挿入した。

#### 硬化、充填、剝落止め

材の虫蝕腐朽に対しては、エキボンガス(臭化メチル+酸化エチレン)による全体の燻蒸を修理に先立って行なうとともに、空隙化が進む体幹部材正面の首柄との矧目に沿う部分、両脚部の上面中央から体幹部材正面および両袖内側の矧目にかけて、各材の像底部などは、解体後イソシアネート系ポリマー(P S N Y・一〇)を浸透させて硬化し、木尿漆を充填して整形した。右ふくらはぎ後方の大きな欠失孔は、周辺の内剖面表層の欠失部分とともに檜材を新補して塞いだ。

鼠害により表層部が損傷した両耳朶は木尿漆で成形し、左前膊の下方奥から臂裏の内剖面にかけての欠失は檜材で補足した。玉眼のあて紙を新補し、痕跡に従って、押さえ木の欠失部、竹釘を補足して周囲を木尿漆で塗り籠めた。

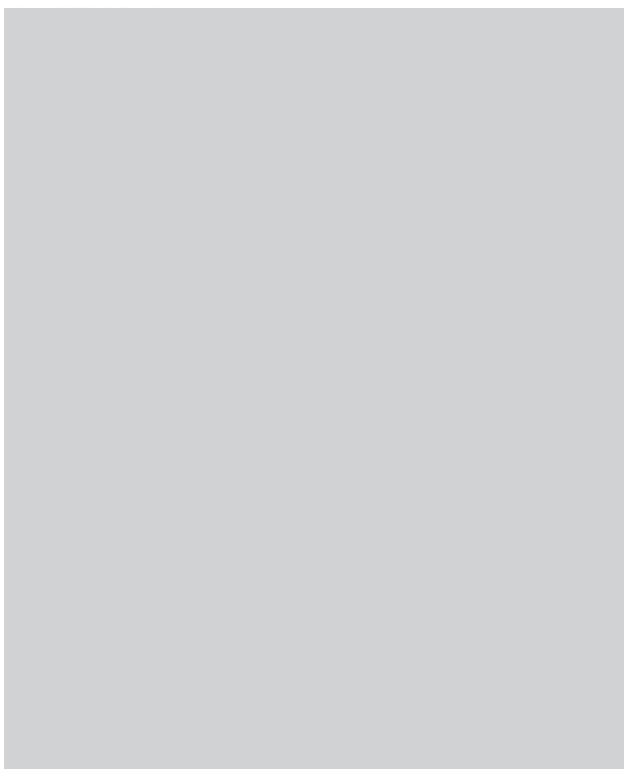
左眼下縁の小割損部、背面右肩の干割れには木尿漆を充填したが、その他の割損は補修しなかった。像内の体幹部材背面と左体側部材の矧面の間隙、腐蝕した鋸、釘等による欠失部は、檜材、木尿漆で充填した。

下地・彩色の剝落止めを水性アクリル樹脂(バインダー一七)とアクリル樹脂エマルジョン(プライマルA C三四四)用いて行った。

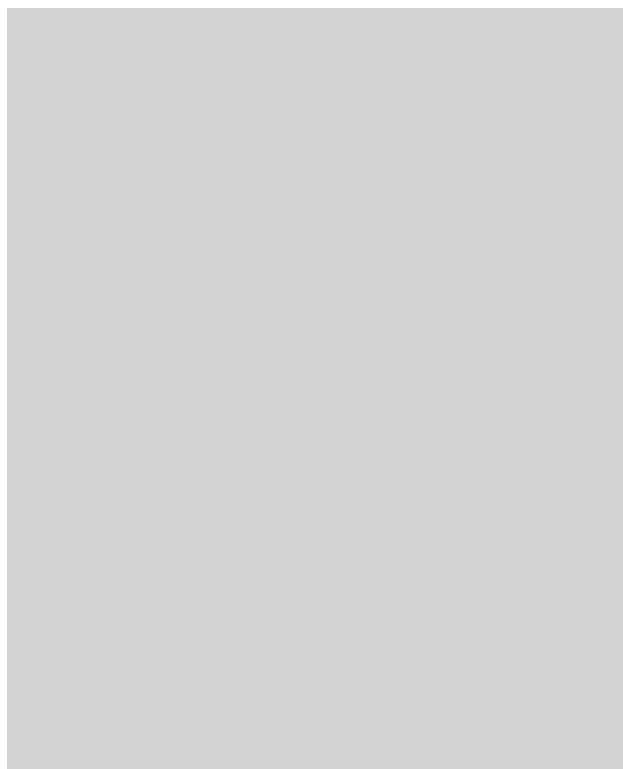
#### その他

修理箇所は古色仕上げとした。像内の墨書は真言陀羅尼をのぞいて籠字をとった。錫杖の柄として使用されていた枝と近世の光背、台座は、損傷し、形状も合わないので撤去し、各檜材黒漆塗の錫杖の柄と方座を新補した。

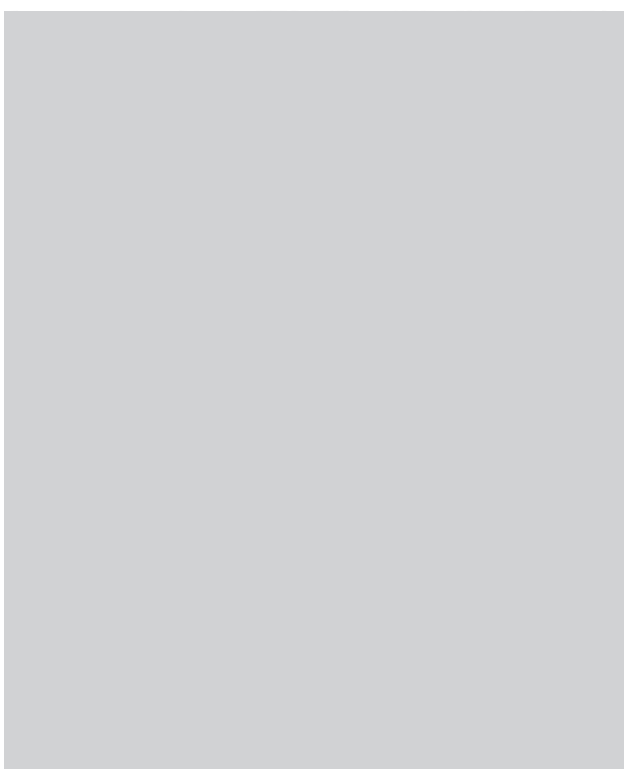
(文化庁文化財保護部美術工芸課 中村 康)



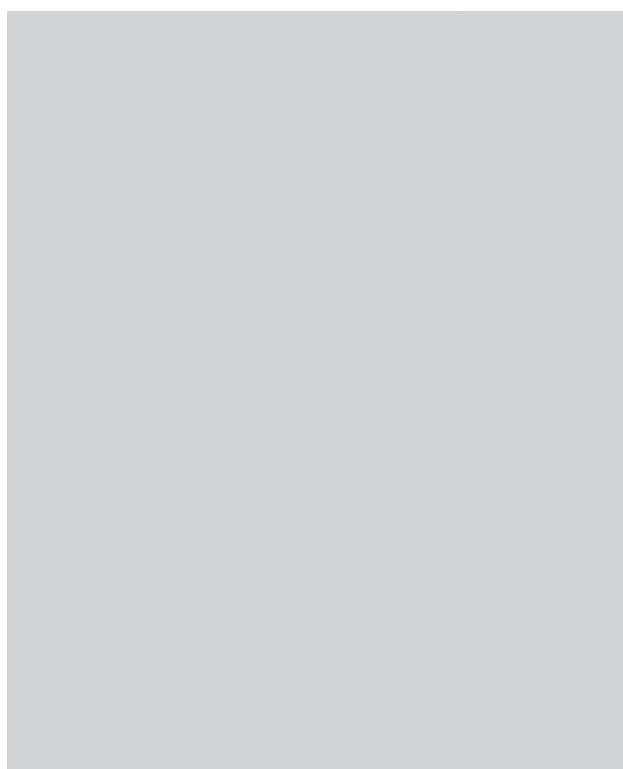
完 成



修理前

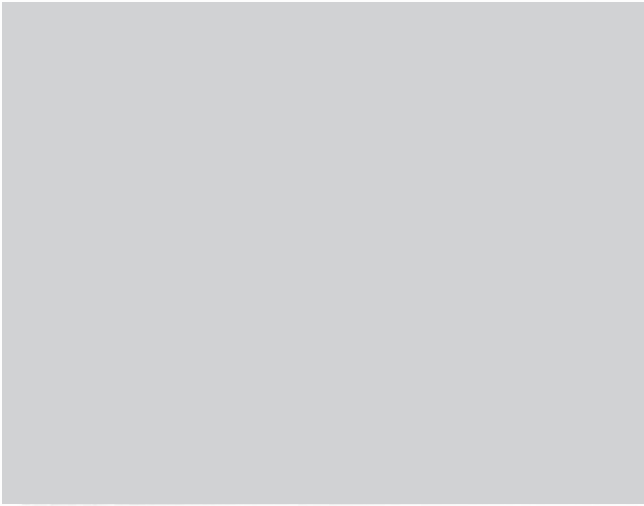


完 成



修理前

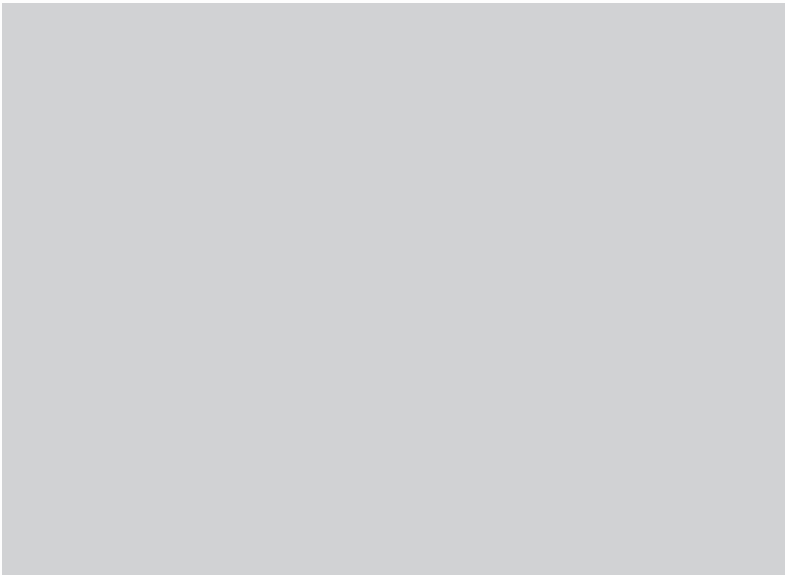
地藏菩薩坐像 瑞林寺



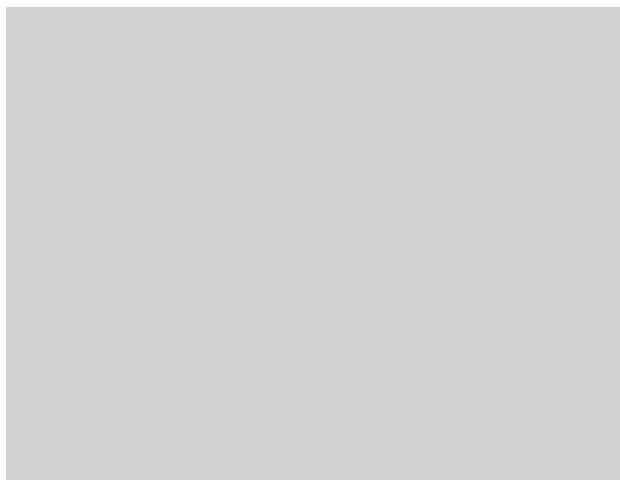
完成（像底）



修理前（像底）



解体狀況



頭部解体狀況

地藏菩薩坐像 瑞林寺